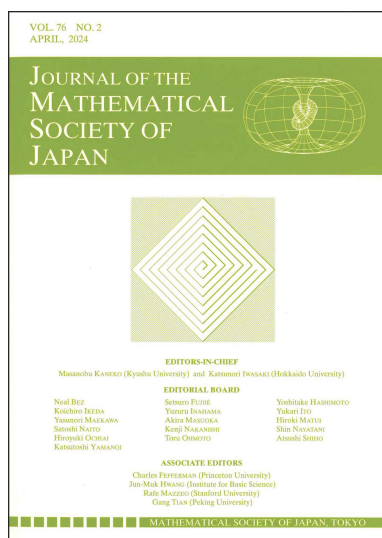


Journal of the Mathematical Society of Japan

(日本数学会)



編集委員長・九州大学大学院数理学研究院

金子 昌信

Journal of the Mathematical Society of Japan, 略称 JMSJ は、日本数学会が年に 4 号発刊している欧文数学誌です。その創刊は第二次世界大戦終戦後の 1948 年（昭和 23 年）、日本数学物理学会が日本数学会と日本物理学会に分かれた翌々年のことでした¹。今から 76 年前になりますので、来年めでたく喜寿を迎えることになります。日本の欧文数学雑誌の中では、前身をどう見るかにもよりまじょうが、数学専門を謳っている雑誌と

しては Japanese Journal of Mathematics, The Tohoku Mathematical Journal に次ぐ古さということになりまじょうか。

数学会のホームページ (<https://www.mathsoc.jp/publications/index.html>) によりますと、JMSJ は「純粋数学の総合誌で、質の高い国際学術誌として数学コミュニティに貢献して」といって謳われています。そこにもありますように、JMSJ は日本数学会の機関誌ではあるものの、会員・非会員を問わず国内外からの投稿を受け付けており、専門家による厳格な査読を経て掲載される論文の水準の高さは、わが国を代表する数学誌として国際的に広く認知されていると言ってよいだろうと思います。編集委員会で毎年報告される数値の中にインパクトファクターというのもあるが、2022 年までの 5 年間は 0.5, 0.7, 0.9, 0.8, 0.7 という数値で推移しています（2022 年から小数点以下ひと桁の表示に変わりましたので、それ以前も四捨五入してひと桁で表しています）。こういう数字に一喜一憂しても仕方ないのですが、まあそこそこ健闘していると言ってよいのではないのでしょうか。ぜひこれをお読み下さっている皆さんにも、自信作を投稿いただくとともに、お知り合いの数学者の優れた成果の投稿先として JMSJ をお勧めいただければ有り難く思います。

ここで編集体制について書きますと、現在の陣容は編集委員長 2 名、編集委員 16 名、

¹前身として、日本数学物理学会時代の刊行物 Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan があります。これは 1919 年に創刊され 1944 年まで刊行されました。そのまた前身があるようで、詳しくは佐宗哲郎氏による記事「数物学会誌の紹介」(<https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/Journal@rchiveStories/Physics/01-05/-char/ja>) を御覧ください。

Associate Editors 4 名です。Associate Editor は 2013 年から置くことになったもので、5 年任期、海外の著名な数学者にお願いしています。毎回の編集委員会に出席いただくことはありませんが、当初のガイドラインによれば、直接 associate editor 宛に投稿された論文があれば、編集部の要請のもとにレフェリーを探したり論文の掲載可否を判断したりという役目を担っています。もっとも、オンライン投稿システムが導入されてからはそういう例はなく、むしろ期待されている役割は、レベルの高い論文が投稿されるように周辺の方に勧めていただくとか、ときにご自身の論文を投稿して頂くということで、これは就任の際にそのようにお願いもしています。またその名前を見て投稿先を選ぶ、という人もいるでしょう。目に見えないところで貢献していただいているのだと思っています。それ以外の編集委員は通常 6 年間務められます。規則上はまず 3 年の任期で始まり、1 年毎に更新しながら最大 6 年、となっています。分野の偏りをなるべくなくし、広い分野をカバーできるように委員が選ばれていると思います。編集委員長は 4 年任期（正確には 1 期 2 年の原則 2 期）、二人の任期が 2 年ずれていて、任期中の役割を変えながら、二人で協力して編集にあたっています。例えば編集委員会の司会を務めるのは 2 年目、3 年目の 2 年間です。また、投稿されてきた論文を、即座にリジェクトするか、編集委員に回すかを判断し、適切と思われる編集委員に担当をお願いするのは就任後 1 年目、2 年目の人が行います。論文を割り当てられた担当編集委員はレフェリーを選定し、その後は担当委員とレフェリーの間のやり取りとなります。やはり分野によって投稿数にばらつきがあり、沢山の担当論文を抱えておられる人、それほどでもない人があるのは致し方ないところと言えましょうか。通常レフェリーは 2~3 ヶ月以内にとお願いしているのだと思いますが（担当編集委員が設定できるシステムになっています）、レフェリーによっては一年以上かかる人もあり、これも当たり外れ、というのか、ご苦労様だなあと思える委員の方、常に何人かおられます。別のところ²に書いたことがあるのですが、このレフェリーというシステム、今のままでいつまで持つのか、どうでしょう。それはともかく、レフェリー依頼には快くかつ速やかに受諾下さり、締め切りを守って、要点を押さえ論点のはっきりしたレポートを送って下さる、このようなレフェリーが編集側としては理想に違いありません。しかし我々も依頼される側に回ることもある訳ですから、なかなか理想通りにはいかないことを承知しつつ、催促、再査読、改訂、各段階で日々ご苦労されているのが編集委員の方々、ということになりましょうか。委員会でご苦労の一端を伺うたびに頭が下がること、しばしばです。

もう一人、重要なスタッフが数学会の担当事務の方です。実際はほぼすべての事務作業を担って下さっており（その仕事は多岐にわたっており、とても書き尽くせません、というより私も全貌を把握しているとは言い難いです）、この方の働きなくしては雑誌の刊

² 『数学通信』第 27 巻第 3 号（2022 年）書評

行はあり得ません。編集委員会は雑誌の刊行に合わせて年に4回開催されています（通常3の倍数月の月末近い土曜で、数学会の年会や総合分科会とは独立に日程を設定しています）。3ヶ月に一回ということになりますので、例えば委員会の次の日にレフェリーレポートが来て、担当編集委員が受理を委員会に推薦しようとしても、約3ヶ月後の委員会まで待たねばなりません。このあたりはもう運不運というしかなく、こちらは何ともしようのないところです。

実際の編集作業ですが、2017年からは EditFlow という、オンラインでの投稿、編集システムが導入され、効率化されています。私はオンライン化する前の状況存じ上げませんが、EditFlow というのはよく出来たシステムだと思います。別のジャーナルの編集委員を務めてもおりますが、他のシステムと比べてもかなり使いやすいと感じました。出版頻度は既にも書きました通り年4号で、1号あたりのページ数は330ページ前後です。この5年間のバックログ（受理が決まって出版を待つ論文）の平均が1200ページ弱ですので、計算上は掲載が決定してから一年以内には出るということになりますが、実際は受理日の関係で前後することもあり、もう少しかかることもままあるようです。

ここで、細かいことですが、覚えておいて頂くと多少なりとも時間の節約になりそうなことを二つばかり。論文のアブストラクトに数式や文献番号を含める方が時々おられます。昔々、それはご法度だと教わった覚えがありますが、当時どういう理由でそうなのかはよく分かりませんでした。電子化の現代でははっきりした理由があって、それは、アブストラクトだけ抜き出して Web ページに載せる、あるいは色々なデータベースにアブストラクトだけ抽出されることがある、その際に数式が正しく表示されない場合があったり、データベースが TeX に対応してなかったりする、また文献リストは分離され参照できなくなる、ことによります。気をつけて頂くとその度に書き直してもらうひと手間が省けます。また論文原稿にカラーが使われる方も時々あり、それは特に図などの見易さを考慮されてのことが多いようですが、JMSJ の冊子体はすべて白黒です（ただしオンライン版ではカラーも可）。こちらは「冊子は白黒印刷にしますよ」ということを編集部（担当事務）から伝えるだけなので大したことはないと言えないのですが、覚えておいて頂くとよいかと思い、書いておきました。その他、詳しくは JMSJ のホームページにガイドラインが載っていますので、是非ご投稿前にご一読下さればと思います。

私が編集委員長に就任したのはコロナ禍が始まってすぐの2020年7月1日付で、既にその年の3月の編集委員会から完全オンラインになっていました。通常10数本の検討論文、そのレフェリーレポート、担当編集委員の説明文などをパソコンの画面で見ながら一つ一つ検討していく作業は、少なくとも私にとって疲れることこの上なく、少し状況が落ち着いた（それでも一進一退ありましたね）21年12月の会議からは、私は毎回秋葉原の数学会事務局に出向いて、委員会の司会を務めました。やはり直接事務の方から注意点など伺って、手元に資料を用意して頂いて進める方が格段に楽かつ効率的でした。

そのころはハイブリッド会議と言っても、事務局に来られるのは私と当時のもう一人の委員長の小野薫さんの他は東京在住の一人か二人くらいで、その方々と委員会が終わったあとに（恐る恐る笑）飲みに行ったりしたのも今となっては懐かしい思い出となりました。

日本数学会は顕彰事業の一つとして、2010年から年に一度「JMSJ 論文賞」の授与を始めており、これまでの15年で30本の論文が受賞いたしました。平均2本ですが、年によって3本また1本の年もあります。著者総数は55人にのぼっています（ちなみに共著の場合、賞状は著者それぞれに渡されます）。この賞の存在も、毎年春の学会で授賞式が行われておりますし、認知度が上がるとともに投稿を促すよい動機付けになっているのではないかと思います。ちなみに私はこの6月末で任期を終えますが、これを書いているのがまさに3月の年会の時期で、2本の受賞論文の著者にはよく知った方々が入っていて、それはたまたまの巡り合わせですけれども（作為はありません、念の為）、授賞式を拝見して何か感慨深いものがありました。

JMSJは2007年から電子版の発行を開始しています。近年、雑誌がオープンアクセスかどうか、ということがよく取り沙汰されるようになっていますが、JMSJについては（紙の）冊子掲載後3年間は有料公開となっているので、オープンアクセスはその後ということになります。もっとも電子版では早期公開があって、論文アクセプト後に著者最終版を<https://www.mathsoc.jp/publication/JMSJ/inpress.html> で無料公開しています。校正が入ったあとの有料公開版はこちら<https://projecteuclid.org/journals/journal-of-the-mathematical-society-of-japan/advance-publication> です。また、これは余り知られていないようですのでこの機会に宣伝しておきますと、数学会の会員の皆さんには、（3年経つ前の）有料分の電子版も公開しております。会員番号とお名前を明記の上 [euclid.subscriber-jmsj\(at\)mathsoc.jp](mailto:euclid.subscriber-jmsj@mathsoc.jp) までお問い合わせ下されば、詳細をご案内させていただきます。

書き漏らしたこともありそうですが、そろそろ切り上げるとします。もう少し面白おかしい話が期待されていたかも知れませんが、力及ばずで、とりあえずの宣伝は出来たでしょうから、任期ほぼ最後の責務は果たしたと思うことにします。繰り返しますが、是非皆さんの優れた成果をJMSJにご投稿下さい。ただ、JMSJは広い分野をカバーする総合誌ですので、編集委員会としては、専門外の人にもある程度まで読めるような書き方をして頂ければ有り難いです。

最後に、執筆にあたり数学会事務局の池崎那津子さんには、様々な裏付け資料を調べていただいたり、内容についての示唆を頂いたり、大変お世話になりました。有益なコメントを下さったもう一人の委員長である岩崎克則さんとともに、ここに記して、感謝申し上げます。